

# 中学校 国語科学習指導案

指導者 高島 幸

日 時	平成 28 年 10 月 15 日 (土) 第 2 限 (10:35~11:25)
場 所	第 1 研修室
学年・組	中学校 3 年 A 組 39 人 (男子 19 人, 女子 20 人)
単 元	読みの幅を広げる 「少年 — 海」(芥川龍之介)
目 標	1. 「代赭色」の海について語られている叙述に基づいて文章を解釈し、語り手を意識する。 2. 学習者相互に読みを交流することによって、読みの幅を広げる。 3. 書き手のものの見方や考え方を読み解くことで、自分のものの見方や考え方を広げる。

## 授業について

研究大会の主題「次期学習指導要領に向けたアクティブ・ラーニングの展開」を受けて、国語科では「学びの質を高めるために」を教科主題として掲げている。

生徒が今後社会に出た際に求められる力としては、科学的な視点で物事の道理を究明し、そこでの知見を実社会で活用する力であろう。国際化が進み、社会が急激に変化を遂げる中で、人間の複雑さの絡まった問題を解決していくためには、今以上に創造性や協調性が求められる。そのようなグローバル社会を生き抜くことができる人材を育成するためには、議論や対話による相互啓発を通して学びを深めるとともに、創造性や協調性を育成することが必要であると考え。作品を構成する諸要因の発見とその意味づけをする中で捉えた解釈を、学習者相互に意識化し、交流をはかることはそのような力の育成につながるのではないか。授業の中で、ファシリテーターとしてそのような学習過程を設定し、別の側面から眺める視座に気付かせ、学びの質を高めていくことをめざしたい。

芥川龍之介の『少年』は、「保吉もの」と言われる作品群に分類される。一九二四年(大正一三)年に『中央公論』に『少年』として発表されたものと、翌月、同じく『中央公論』に『少年続編』として発表されたものを、一つにして六章で構成されており、保吉が少年時代の体験を回想的に語るといった構造を持っている。教科書に掲載されているものは、『少年』のうち、「四 海」を抄出したものである。「少年 — 海」は、物語世界から三〇年後に近い時点から回想的に語られているが、少年「保吉」と三〇年後の「保吉」、そして「語り手」との関係性をどのように捉えるかは学習者によって異なるだろう。読みを他者と交流することで、学習者に多様な読みを共有させたいと考える。ファシリテーターにより、生徒が到達した読みをどこまで多様化し、深化させることができるのか、そのことについて考えてみたい。

## 評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	話す・聞く能力	知識・理解
・語りに即して作品の叙述を根拠としながら読もうとしている。	・小説における語り手を意識することによって、内容の理解に役立っている。	・異なる読みがあることを想定し、聞き手に自分の考えを理解してもらえるように話している。 ・話し手の考えを聞き取り、自分の考えと比較している。	・語句の意味や用法を理解しようとしている。

## 学習計画（全4時間）

次	学習活動	評価規準と方法
1	全文を通読し、自己の読みを形成する。語句の意味・用法については学習シートで確認する。この小説はどんな小説か、考えた点・疑問点をカードに書く。（1時間）	関・読・知 行動観察・カード
2	グループごとに他者と交流し、多様な読みを形成する。各自の読みを相互評価し、疑問点の解決をはかる。読みの到達点と解決できなかった疑問点をグループごとに発表する。（2時間）	関・読・話・聞 行動観察・発表資料・発表
3	ファシリテートにより読みの多様化と深化をはかる。 （1時間：本時）	関・読・話・聞 行動観察・発表

## 本時の学習目標

1. 語り方を意識した読みの交流を通じて、読みの多様化と深化をはかる。
2. この作品で語られているものは何かを考える。

## 本時の学習指導過程

学習活動	指導上の留意点	評価の観点と方法
1 前時の振り返りをする。	・交流して到達した読みと、未解決の疑問点とを確認させる。	未解決の疑問点を自己の課題として考えようとしているか。 行動観察
2 小説をどのように読んだか再考する。 I 海を考える。 II 語りを考える。	・海の象徴するものについて考えさせる。 ・語りと語られているものについて考えさせる。	描写に即して考えようとしているか。 発表・行動観察 語りについて考えようとしているか。 読みの多様性について理解しているか。 行動観察
3 本時のまとめ		

「少年—海」(芥川龍之介) 授業資料

広島大学附属中・高等学校 国語科 高島 幸

資料

1 教材「少年—海」(学校図書)

2 グループ・個人でまとめた発表資料

3 今までの板書

授業過程 (全五時間)

第1次 全文を通読し、感想文及び誰が何を語っているのかを書き、疑問点(二つ以上)を探す。いずれもワット(資料②・③)で確認する。(1時間)

第2次 各班四〜五名の九班に分かれる。机の配置を班員同士が向かい合えるように移動する。前時に提出した相互評価シートを返却し、疑問点の解決をそれぞれ作成した感想文及び疑問点について各班で交流する。各自の読みをかたして資料(資料④)にまとめる。(1時間)

第3次 発表以外の疑問点と解決できなかった疑問点について各班で整理し、資料をもとに班ごとに発表する。

第4次 交流して到達した読みと未解決の疑問点についてフアシリテートすることによって確認し、読みの多様化と深化をはかる。(2時間・2/2本時)

感想

最後の九行は必要ないと思った。なぜなら、よくわかるといふ、小説に必要はないと思った。この文章は全体的に面白くないと思った。... 代赭色の海は、今度ほどおきながら、それを否定したかと思うと、今度はこちらが現実かと読者に疑問を投げかけ、そこへ「お、お、お、お」と聞いてきた。ここで話がこんがらがった。そして「お、お、お、お」と聞いてきた。... 代赭色の海は、今度ほどおきながら、それを否定したかと思うと、今度はこちらが現実かと読者に疑問を投げかけ、そこへ「お、お、お、お」と聞いてきた。...

「保吉」を名乗って、自分の体験をそのまま語って最後に「ワット」について主張しているだけではないか。もとより「ワット」が好きな私には向かない話だと思った。... 「保吉」の名前を名乗って、自分の体験をそのまま語って最後に「ワット」について主張しているだけではないか。もとより「ワット」が好きな私には向かない話だと思った。...

「少年—海」(芥川龍之介) 学習シート 3年A組( )番 名前( )

注意 格助詞「に」:::主格を表す。「が」:::原因・理由を表す。「で」:::手段によって

保吉の海を知ったのは五歳か六歳の頃である。もっとも海とはいふものの、万里の大洋を知ったのではない。ただ大森の海岸に狭き東の京浜を知ったのである。しかし狭き東の京浜も当時の保吉には驚異だった。奈良朝の歌人は海に寄せる窓を、天船の香取の海にいかり下ろしいかなる人かもの思はざらん」と歌った。保吉はもろろん恐も知らず、万葉集の歌などというものはなおさら一つも知らなかった。が、日の光りに輝いた海、何か妙にも悲しい神秘を感じさせたのは、事実である。彼は海へ張り出した腹巻張りの茶屋の手すりにつまみ海を眺め続けた。海は白々と輝いた帆かけ船を何そうも浮かべている。長い煙を空へ引いた二本マストの汽船も浮かべている。翼の長い一群のカモメは、ちょうど猫のように鳴き交わしながら、海面を斜めに飛んで行つた。あの船やカモメはどこから来、どこへ行ってしまふのであろう? 海はただ幾重かの海苔粗菜の向こうに青々と煙っているばかりである。...

Table with 2 columns: 驚異, 不可思議, なぎさ, 享楽, 無気味, 右往左往, 従来, 殊に, 予期, 眞理, 眞理, 興存, 徒勞



見しよう。海もそのうちに沖のように一面に青々となるかも知れない。が、将来に憧れるよりもむしろ現在に安住しよう。——保吉は予言的精神に富んだ二、三の友人を尊敬しながらしかもなお心のいちばん底には相変わらず二人こう思っている。

大森の海から帰った後、母はどこかへ行った帰りに「日本昔話」の中にある「浦島太郎」を買ってきてくれた。こういうおとぎ話を読んでもらうことの楽しみだったのはもちろんである。が、彼はその他にももう一つ楽しみを持ち合せていた。それはあり合わせの水鏡の具、いちいち挿絵を彩ることだった。彼はこの「浦島太郎」にも早速彩色を加えることにした。

「浦島太郎」は一冊のうちに十ばかりの挿絵を含んでいる。彼はまず浦島太郎の童宮を去るの図を彩り始めた。童宮は緑の屋根瓦に赤い柱のある宮殿である。乙姫は——彼はちよつと考え、乙姫もやはり衣裳だけは一面に赤い色を纏うことにした。浦島太郎は考えずともいい、漁夫の着物は濃い藍色、腰みのは薄い黄色である。ただ細い釣りざおに、ずつと黄色をなすのは、内外彼には難しかった。ミノガメも毛だけを緑に塗るのはなかなか生易しい仕事ではない。最後に海は代赭色である。バケツのさびに似た代赭色である。——保吉はこういう色彩の調和に芸術家らしい満足を感じた。殊に乙姫や浦島太郎の顔へ薄赤い色を加えたのは、すこぶる生動の趣でも伝えたもののように信じていた。

保吉は早々母のところへ彼の作品を見せに行った。何か縫い物をしていた母は老眼鏡の類感しに挿絵の彩色へ目を移した。彼は当然、母の口から褒め言葉の出るのを予期していた。しかし母はこの彩色にも彼ほど感心しなかつた。

「海の色はおかしいねえ。なぜ青い色に塗らなかつたの？」

「だって海はこういう色なんだから。」

「代赭色の海なんぞあるものかね。」

「大森の海は代赭色じゃないの？」

「大森の海だって真つ青だあね。」

「うん、ちよつとこんな色をしていた。」

母は彼の強情さ加減に驚嘆を交じえた微笑を漏らした。が、どんなに説明しても、——いやかんしゃくを起こして彼の「浦島太郎」を引き裂いた後さえ、この疑う余地のない代赭色の海だけは信じなかつた。……

「海」の話はこれだけである。もつとも今日の保吉は話の体裁を整えるために、もつと小説の結末らしい結末を付けることも困難ではない。例えば話を終わる前に、こういう敷衍を付け加えるのである。——「保吉は母との問答の中にも一つ重大な発見をした。それは、誰も代赭色の海には、——人生に横わる代赭色の海にも目をつぶりやすいということである。」

けれどこれもこれは事実ではない。のみならず満潮は大森の海にも青い色の波を立てている。すると現実とは代赭色の海か、それともまた青い色の海か？ 所詮は我々のリアリズムも甚だ当てにならぬというほかはない。かたがた保吉は前のような無技巧に話を終わることにした。が、話の体裁は？——芸術は諸君の言うように何よりもまず内容である。形容などはどうでも差し支えない。

存外

体裁

甚だ

無技巧

疑問

- 1 保吉は小説を書くのか
- 2 「予言者の精神に富んだ二、三の友人」はどういう主張をしているのか
- 3 三十年前の保吉の態度は三十年後の保吉にそのまま当てはまる態度であるとはどういう意味か
- 4 語り手と保吉は何かつながりがあるのか
- 5 三十年後の保吉は何をしているのか
- 6 「人生に横たわる代赭色の海」は何を表しているのか
- 7 なぎさに近い海がなぜ代赭色に見えたのか
- 8 代赭色に見えたのはなぎさに近い海だけだったのに、なぜ全て海を代赭色で塗ったのか
- 9 1——のはたらきは何か
- 10 ラスト2段落の意味は
- 11 「リアリズム」が当てにならないとは
- 12 芥川龍之介がこの作品を通して何を伝えようとしたのか
- 13 なぜ色彩を加える時赤を加えたのか
- 14 なぜ母の信念はあんなに固かつたのか
- 15 芸術はまず内容であるとは
- 16 なぜ保吉は海の色を代赭色以外に認めなかつたのか
- 17 最後のまどめで体裁を整える文を示したのにもかかわらずあえてそれをまどめの文としなかつたこと
- 18 本に色はついていないけど保吉は水鏡の具を持っていったということはそこそこ金持ちか
- 19 なぜ五歳から六歳まで海を見る機会がなかつたのか
- 20 なぜ海と出会ったエピソードが初めに書いてあるのか
- 21 「のみならず満潮はく立たせている」という部分
- 22 「前のような無技巧」の「前」とは
- 23 なぜ小説らしい締め方をしなかつたのか
- 24 海の姿の表し方を様々な言葉で擬人法なども使っているところはどうしてこだわったのか
- 25 五・六歳の頃にもかかわらず大人のような考えを持っているのはなぜか
- 26 なぜかんしゃくを起こしたとはいえ、「浦島太郎」を引き裂いてしまったのか
- 27 最後の「けれどもこれは事実ではない」とはこの小説がフィクションであることを指しているのか
- 28 「波は今、彼の前へひとりの海草を運んできた」という文の意味・効果
- 29 最後の二段落の存在理由
- 30 「カモメが猫のように鳴き交わす」という意味
- 31 「茶屋の手すりに眺めていた海」という意味
- 32 保吉は語り手なのか
- 33 なんて浦島太郎を引き裂いた描写がないのか
- 34 五歳か六歳のときに残酷な現実を承認できたのはなぜか
- 35 なぜ人は全ての「水」というものを青で表現しようとするのか
- 36 なぜ昔の人は海水浴に行かなかつたのか
- 37 現実の海は何色であるのか、答えはあるのか
- 38 最後に話の体裁はと外からこのお話の内容を振り返っているが、これは誰が何に言っているものか

1 班 メンバー

■解決できた疑問点

母の信念はなぜあんなに固かったのか

【そう考える根拠】

世間が「海は青」という常識にとらわれていることを、母のこころで表わされているのではないかと、母は彼の強情まがいに驚嘆を交えた微笑をもらした。  
代赭色の海がある可能性をも考えなかった

■解決できなかった疑問点

ラスト一段落の意味は

【交流内容】

2 班 メンバー

■解決できた疑問点

「人生に横たわる代赭色の海」は何を表しているのか

【そう考える根拠】

保古にとって代赭色の海とは自分で見て確認した一般的な主観とは異なる事実のこと。

みんなとは違う現実をつきつけられた。  
誰にも受け入れてもらえない

人生

身近にあるもの

流れていくもの、地理的?

見なかったことにしよう

みんなが違うと言うから

目をそわけてはるもの

代赭色の海  
青い海

■解決できなかった疑問点

保吉は小説を書くのか

【交流内容】



3 班 メンバー( )

■解決できた疑問点

五つツツ  
 〇「予言者め精神に富んだ二三の友人」  
 〇「人に似たある代補色の海は何と表していいかわか  
 〇なで母は「海は青」としか...

■「そう考える根拠」

〇彼は多重人格であり、海は結局一面青になると言っている。  
 〇人柱の柄杓期。  
 〇大人になってしまった母は年老いて頭が固く信念を変えられなかった。  
 〇新しい意見を取り入れようとしないから、サレ。

■解決できなかった疑問点

〇ラストユ殺落の意味  
 〇芥川：かこの作の如くを述べて...  
 〇なで小説らしい締め方をしなかったのが

【交流内容】

〇作者の考えを伝えたが、  
 〇所詮は我々のリリリズムも甚だ当てにはならぬ  
 〇最後のエピソードに書いてあるように  
 〇芥川さんが意見を少しはめいた

4 班 メンバー( )

■解決できた疑問点

① 前のような無技巧「前」とは  
 ② 前世色移を加える時、表を加えたのか  
 ③ 最後は結局「表」は見えなかったのか  
 ④ 「人に似たある代補色の海」は何と表しているのか  
 ⑤ 最後は結局「表」は見えなかったのか  
 〇これは誰が何に言っているのか

■「そう考える根拠」

① 前と見れば、海は結局「一面青」と言っているから、その話の終りまで「前」で、無技巧に終らせていることだと思つ。  
 ② 赤と入ることで生と生と躍動する感じを表すため。  
 ③ 子どもの方は人間の出す汚れて汚く汚れているから。  
 ④ 自分自身を描いていたものと違っていて受け入れられず、目とつぶるもりを表している。  
 ⑤ 最初から最後の部分の直前までは、作者が保言のことを語っているが、最後のこの部分は作者の主体と書いて言っているものだと考えられる。

■解決できなかった疑問点

〇「予言者め精神に富んだ二三の友人」はどういう主張をしているのか  
 〇「人に似たある代補色の海」は何と表しているのか  
 〇「なで母は「海は青」としか...」

【交流内容】

〇作者の考えを伝えたが、  
 〇所詮は我々のリリリズムも甚だ当てにはならぬ  
 〇最後のエピソードに書いてあるように  
 〇芥川さんが意見を少しはめいた



5 班 メンバー

■解決できた疑問点

- 母の信念はなぜあんなに固かったのか。
- ・五六歳の頃にもかかわらず大人のような考えを持っていくのはなぜか。
- ◎ラスト二段落の意味。

【そう考える根拠】

○世間では「海が青い」という常識があるから。

- ・設定では五六歳だが、筆者の伝えたいことを伝えるために
- ・見た目は子ども、頭脳は芥川龍之介

- ◎他の人と違う文章を書きたかったから。
- ◎疑問として投げかけている。

■解決できなかった疑問点

【交流内容】

6 班 メンバー

■解決できた疑問点

- なぜ保吉は海の色を代赭色以外に認めなかったのか

【そう考える根拠】

・遠く見たものより近くのものが正しい

○保吉が頑固だから 子供独特の頑固さ

・青いものだと思っ、ていた↓差が大きく、印象に残った

・衝撃を受けた 海は代赭色だというイメージが固定された?

・青色 ↓大人の誤り ↓正そうとする

・勇敢にも現実を承認 ↓現実には代赭色で、青色は誤りだったと思った

・保吉の感じられる範囲がなごさまでだった

○なぜ母の信念はあんなに固かったのか

↓ 常識だから 疑いようのないことだから

・自分が見たとき、たこえ赤か、たとしてもそれとそんなに大きくとらえなかった

沖は青い↓気にしなかった

父、叔父など(大人)  
自分にと、てはなごさが「海」だ、沖は小さいもの

■解決できなかった疑問点

【交流内容】



7 班 メンバー

■解決できた疑問点

○保言は小説を書くのか。○なぜ小説らしい構えをしたのか。○なぜ昔、人目をはばかに行かぬか。○「佳くは海は何を表しているか。」

【そう考える根拠】

○今の保言は困難ではない。○どう部分から保言が文章を書くことより設定があること分かる。○けれども小説は筆実ではない。○↑事実であることと書きまであり小説にはしつたてはみられた。○服と船のかげんとうだった。

■解決できなかった疑問点

【交流内容】

文章の書き手は芥川が執筆保言  
保言は他小説に登場人物の心↓芥川は何の関係があるのか？  
代赭色の海はナラ  
護岸工事をしていながら代赭色の海か？  
人生に横たわる代赭色の海↑腹漢  
理想とかが組んだ現実  
事実とほほい

8 班 メンバー

■解決できた疑問点

○代赭色に見えたのはなぜに近い海だったのに、なぜ全て海を代赭色で塗ったのか  
○浦島太郎を引寄せたのはなぜか  
○現実の海は何色か、あるいは答えはあるのか  
○母信念はなぜあんなに固かったのか  
○人生に横たわる代赭色の海は何を表しているのか  
○ラストの船客の書は

【そう考える根拠】

○保言は海の色を代赭色以外認めなかったから  
○母が自分の考えを完全否定したから

■解決できなかった疑問点

【交流内容】



■解決できた疑問点

なぜ母は保吉の彩色を否定して海は青いと信じ込んでいたのか。

【もう考える課題】

大人は頑固だから。

子供は自分の目で実際に見たもの、体験したことを絶対的のものとして捉えるが、大人は常識や理想を信じ込んでおけるとかけ離れた現実には目をつぶりやすい傾向がある。

■解決できなかった疑問点

芥川龍之介はこの文章を通して何を伝えたいのか。

【文章内容】

現実とは異なれど、多面的な視点から捉えようとする。かといって理想にとらわれすぎるのはおろかである。やはり、多面的な視点から捉えようとするべきである。

所詮 我々のリアリズムも甚だ当りにならない

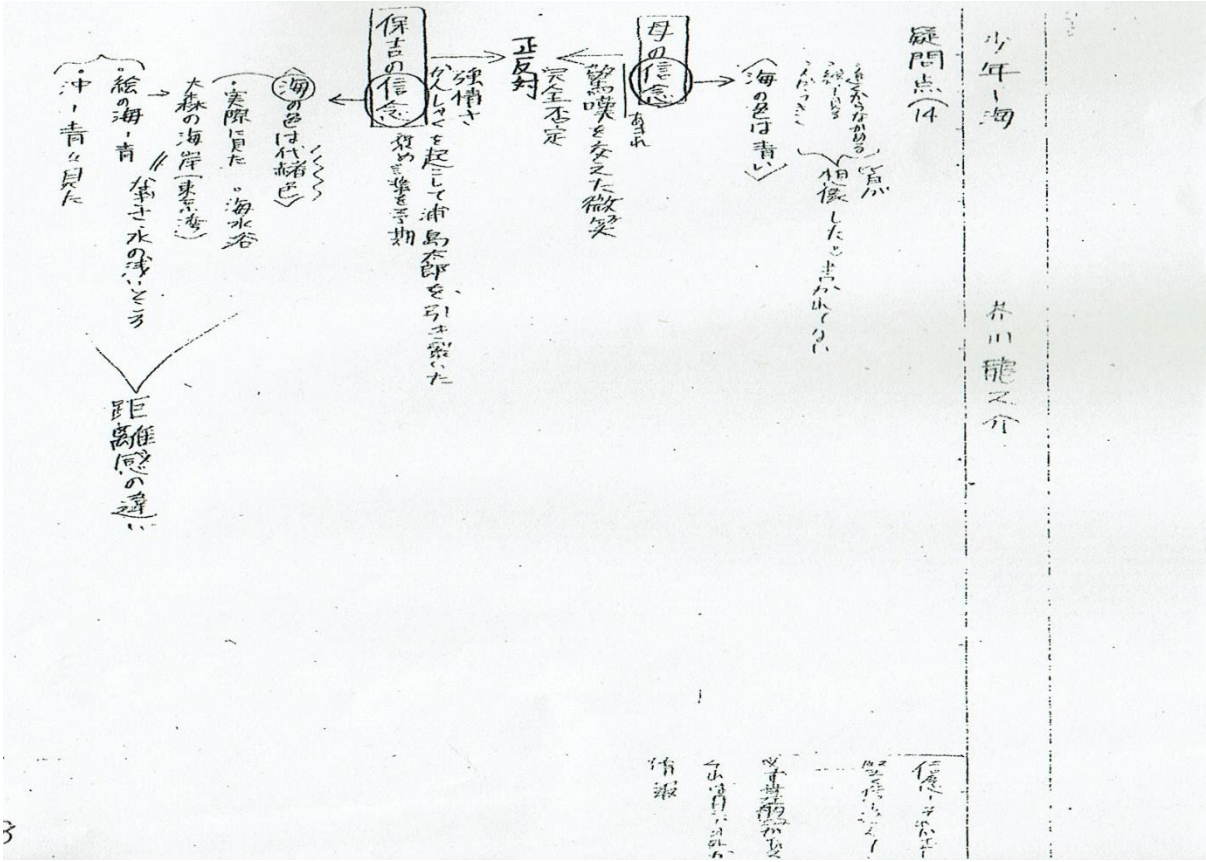
3	2	1	班
<p>○ 未解決 X 23 ○ 11 ○ 10 X 6 X 2</p>	<p>○ 1 X 6</p>	<p>X 6 ○ 10 X 14</p>	<p>○ X 未解決 X 未解決 解決すべき 疑問点</p>
<p>○ 未解決 ○ 23 ○ 11 ○ 10</p>	<p>○ 1</p>	<p>○ 10</p>	<p>解決すべき 疑問点</p>
<p>23. 保吉の考えに芥川の意見を加えた。</p> <p>6. 人生に横たわる代赭色の海 目をむくむくたくなるまうな事実</p> <p>2. 予言者の精神に富たニ、三人 自分の考え</p>	<p>6. 代赭色の海に一般的ではない いざ、目とは違うものを突きつらわけても 目をやわらしてしまふ</p>	<p>6. 一般的な青い海にとらわれていたら、代赭色の海が目の前に現れた時、信じていることが、信じていない 今まで信じてきたことが、変わったとよに 信じられぬ。</p>	<p>14. 保吉は大海の外見内とが 母は海は青いものだと思いついてる</p>
<p>予言者の精神に富たニ、三人は自分の考えを承け、疑問が残った。</p>	<p>6. 根拠が1班と似ていた。</p>	<p>6. 根拠が1班と似ていた。</p>	<p>私の気づき 6. 根拠が1班と似ていた。でも、この班も似ていたり、なと思いついた。</p>

班	4	5	6
○×解決済 ○未解決	○	○	○
解決すべき 疑問点	2	10	14
解決の根拠	「いいえ、さうするから」 「さうしてさうして」 「さうしてさうして」 「さうしてさうして」	他の人との違いを示したところ、 時間切れ	保土は頑固な、 一般の子供の性質、 「ギョッパ」じやう強い印象、 保土は「河」とは「常」の、 常識だから、 「常」の「常」の「常」の「常」
私の気づき	「常」の「常」の「常」の「常」 「常」の「常」の「常」の「常」 「常」の「常」の「常」の「常」 「常」の「常」の「常」の「常」	「常」の「常」の「常」の「常」 「常」の「常」の「常」の「常」 「常」の「常」の「常」の「常」 「常」の「常」の「常」の「常」	「常」の「常」の「常」の「常」 「常」の「常」の「常」の「常」 「常」の「常」の「常」の「常」 「常」の「常」の「常」の「常」

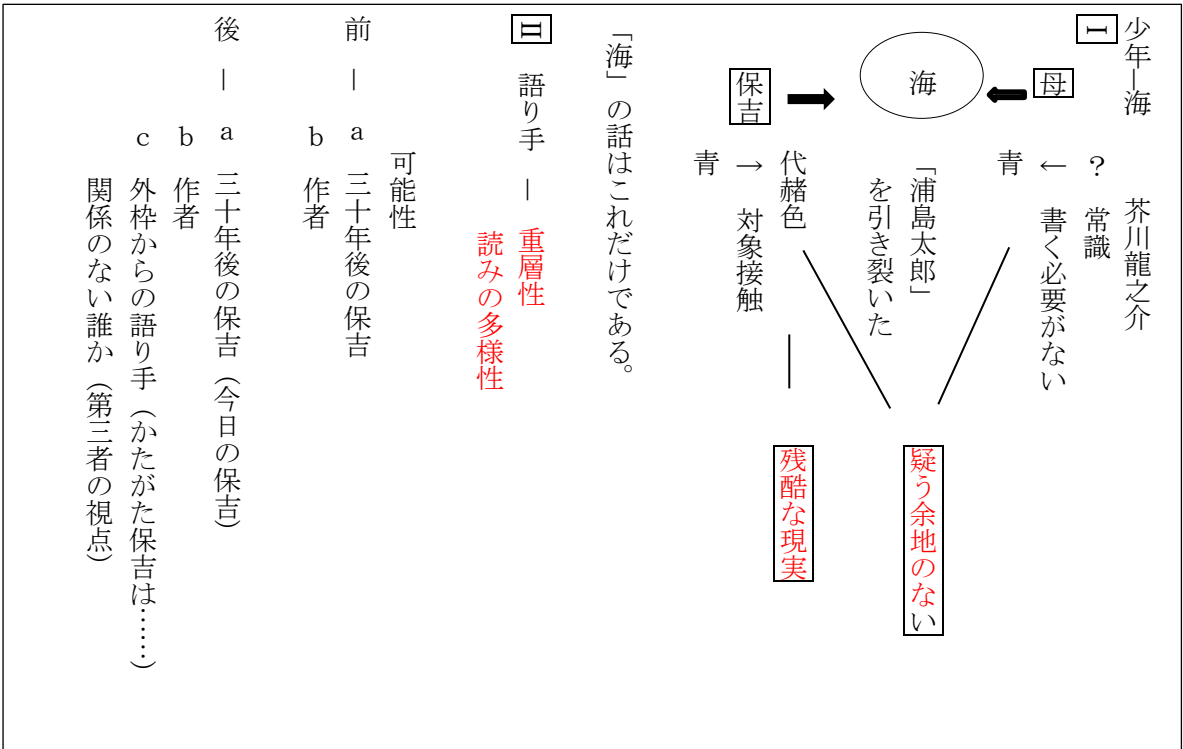
班	7	8	9
○×解決済 ○未解決	○	○	○
解決すべき 疑問点	1	10	14
解決の根拠	①最後の「もとも今日の」から保吉は小説をかく ②「けれども私は事実ではない」 ③理想とかけ離れた現実	④絵しか見てなかったし全て青 自分で見たら代赭色し全てぬた ⑤母に完全否定されたから （自分で見たのに）	⑥大人は頑固——常識と理想が 子供は自分のみたものを絶対的なものとしてとらえる
私の気づき	1と23の考えを 書いて、やはり最後 2段落が鍵となる なと思った。	8の考えには、 とても納得した	14の大人と子供 を比較していて 分かりやすかった。



前時の板書



本時の板書



## 反省と課題

今回は、生徒が教材を読んだときに感じた違和感を深めていくことを意図し、言葉をもとに生徒だけでは到達できない高次のレベルまで引き上げるファシリテートを目指した。自分たちの抱いた疑問点を班ごとに話し合わせた資料を見てみると、2・6・8・9班では、「海」を描写として解決できていることがわかる。そして「保吉」と「母」のそれぞれの「海」そのものが対立的なものであるというところまでは班での話し合いによって捉えられている。しかし、相克としてしか捉えられていないその認識の根本的なあり方としては、実は両者ともに同じ「疑う余地のないもの」である。授業では、ファシリテートによりその問題が解決されたと思われる。また、多くの班で感じられていた違和感は、ⅠとⅡとのつながりによるものだと考えられた。しかし、語り手存在を生徒は意識的に明確に捉えることはできていない。生徒の発達段階を考えて、生徒に語り手を選択させることにより、なぜあのように語らざるを得なかったのか、否が応にも向き合わせることによって、生徒にとって疑う余地のない、小説とはこういうものだという認識を揺さぶり、いったい誰が語っているのかということに向き合わせることを意図して授業を構成した。物語とは大きく違い、小説「海」はよくわからないのがおもしろいということは生徒に伝わったのではないだろうか。

課題としては、「なぜこういう語りをしたのか」という問いを焦点化し、芥川にとっての小説・芸術について生徒に深く考えさせるファシリテートが考えられる。「生徒にとっての小説」については考えることができたが、なぜこういう語りをしたのかについて考えさせることにより、「芥川にとっての小説とは……」というところまで生徒は思考を深めることができたのではなかろうか。「リアリズム」について懐疑的な作者が思わず表出してしまい、語り手に皮肉な語り方をさせたとも考えられる。ⅠとⅡのつながりの違和感を解決する際に、是非焦点化し、生徒の自立的な思考や活動を促進し、生徒の思考を深めたいと考える。